主体的職業体験

中国語学科　矢野尊嗣

1．初めに

テクノセンターのインターンシップを知るきっかけとなったのは、２０１０年３月に行った広州、深圳（３月７日から３月12日）での企業見学でした。その時は寮の生活やインターンシップ生の行動に驚いていました。しかし帰国後、見学した時に交流をした関西大学インターンシップ生の行動を思い返してみたり、インターンシップの内容を調べてみたりすると、その環境に飛び込むほうが、日本にいるより収穫が多いと思いました。

そこで私は日本で体験できない環境に入り、様々な人と交流することで必ず新しい発見があり、実際に現場に行き実習することで将来、社会に出ていく上で大切な事を学べるのではないかと思ったからです。

2．参加目的

今回のインターンシップの目的は３つあります。１つ目は最近のテクノセンターの存在意義です。テクノセンターは１９９１年にスタートし、中小企業の中国進出サポートをメインとして来料加工する企業をサポートし発展してきました。しかし最近では加工したものを中国国内で売る流れが出てくるなどテクノセンターのテナントとして入るメリットが今後、十分に活かせていけなくなるのではないかと考えました。２つ目は欧米各地で現地採用の経験がある石井次郎さんとまたお話ができると思ったからです。今年３月７日から３月12日に行った広州・深圳の企業訪問でテクノセンターに行く機会がありました。そこで石井さんの考えを聞いて、今回また石井さんの新たな考えを聞くことができると思いました。３つ目は実際に従業員が泊まる宿舎に一緒に泊まることです。深圳に行く前、宿舎の様子は聞いていましたが、実際に泊まることで何か自分の中で、発見があると思いました。

3．研修結果

最終的に10社企業を伺い、工場長のお話や実習を行うことができました。また８月18日から９月１日班の自主的なミーティングの中でもいくつか情報をいただきました。ここでは10社のうち３つの会社を紹介して、１つ目の目的であるテクノセンターの存在意義で分かったことをまとめてみました。

〈会社紹介〉

・Ｉ社（会計業務）２００４・年にテクノセンターに入る。主な業務は香港で法人の設立、

記帳代行、コンサルタントで、顧客の4割がテクノセンター内にある会社である。また来料加工の形式から独資企業へ変換の流れがある今、今年4月から中国で法人を作る新たな業務を追加して、現在のテクノセンターの流れに合わせて体制を作っている。

・N社（プレス加工）２００２年にテクノセンターに入る。来料加工と独資企業の2社あり来料加工はストーブの側面にあるカバーや食器かごを作っている。もともと台湾で加工していたが、値段が高く、不良品も1％から2％も出るのでテクノセンターに入ってきた。独資企業は自動車のシート内にある金属を加工している。こちらは中国国内で需要があるため独資企業として加工している。

・K社（印刷リボン、電算機用シームレス）１９９９年にテクノセンターに入り印刷リボン、タクシーメーターのレシートなど作っている。テクノセンターに入り、約10年が経ち、人件費などのメリットを感じている。海外向け（日本、タイ、韓国、ドイツなど）の商品はテクノセンターの工場で作っているので、来料加工のメリットもある。

〈部門に入っている企業側から〉

・人件費や場所代の面でまだメリットがある。

・自ら輸出入の手続きや従業員募集をするよりテクノセンターでやってくれた方が良い。

・最初、テナントとして入った時は知識不足で大変だったが、従業員との接し方など困ったことがあると助けてくれた。

・テクノセンターに入っていることでコミュニケーション（情報の共有）がとれる。

〈テクノセンター側から〉

・来料加工は輸出の割合からも必要である。

・独資の流れはあるといってもテクノセンターの従来の形はこれからも重要で、さらに独資企業を幅広く支援をする形ができてきた。

・また今後テクノセンター内に独資企業を支援する部署を作る。

〈企業からほかの意見〉

・撤退を考えている。

・利益が出なくて大変である。

・今までの来料加工から独資企業へ変わることを考えている。

4．研修から思ったこと

企業を伺って思ったことは、これからもまだテクノセンターにテナントとして入るメリットは十分にあるということです。最低賃金が年々上がっていても人件費が削減できているということは、まだ中国やテクノセンターに進出するメリットがあると言えます。そしてテクノセンターが企業に提供する工場スペースや人材提供に助かっているという声もありました。また会計業務として働いているI社は新しいタイプのテクノセンターのテナントで、担当している約１００社のうち約40社がテクノセンターのテナント会社であるため、身近でサービスができるメリットを感じていました。

撤退や利益が出ないという話がありましたが、これから中国も需要が高まる可能性のある医療系商品の企業であったり、独資企業への転換を考えているということだったり、これらの企業も将来は明るいと思いました。独資企業への転換であればテクノセンターとしての仕事は成功になります。私が考えるテクノセンターの存在は来料加工としてのメリットがまだあり、独資企業転換の支援体制ができ始め、これによりテクノセンターの提供するサービスの幅が広がり、更なる発展が見られる必要な存在と思いました。

２つ目の目的である石井さんとは2回お話を聞くチャンスをもらい、石井さんの考えの一部を聞くことができました。「全力で挑戦して失敗したなら良い、しかし中途半端で失敗するのはいけない。」「恩は助けてくれた人に必ず返さなくてよい、助けてくれた人が不自由ない生活を送っているのなら、他の困っている人を助ける。」以前、石井さんがある人に助けられてそ

こで言われた言葉だそうです。このことから石井さんの考えは単純明快、決めたことは曲げない、即行動できる人だと思いました。また人を引きつける何かを持っていると思いました。それは話しているときのうれしそうな顔と私は思いました。これらは私たちがこれから社会に出る大学生に必要なものだと思いました。今後またどこかでお会いすることがあれば、また新しい石井さんの考えを聞くことができると思いましたし、また聞きたいとも思いました。

３つ目の目的である宿舎の生活では初めての体験がたくさんありました。ご飯であったり、底が抜けそうなベッドであったり、お湯の出ないシャワーであったり、１４日間で数回の停電であったりと日本では体験できないことが多くありました。帰国し思ったことは、日本に帰ってきて今まで普通の環境だと思っていた日本の暮らしに不自由がなく幸せを感じました。また宿舎に慣れてきたころには、何とか生活できるとも思いました。しかしこう思えるのは実際に生活したからいえることであって貴重な体験ができたと思っています。

従業員との生活も新鮮な体験でした。従業員は同じ部屋に3人いて四川省、湖北省などから来た21歳の人たちでした。同じ年代の人たちと同じ屋根の下で生活をして中国語を教わったり、逆に日本語を教えたりしました。また生活をして初めて分かることが多かったです。中国人と日本人。考えていることは違いますが、音楽を聴いて、歌って、仕事終わりには趣味に時間を使う。若いときからタバコを吸って、休日には友達・彼女と遊びに出かける。生活リズムが似ていると思いました。しかし今の日本の若い人たちに言われているような夢をなくしてしまって、生きていくようなことはしてほしくないと思います。今のところ80後、90後の話を聞いていると、そこまで心配はしていませんが、さらに生活が豊かになっていくうちに考え方までも同じになってほしくはありません。いつまでも夢をもって実現のため努力し、両親を大切に思っていってほしいと思いました。

5. 今後　まとめ

今回のインターンシップで学んだこと、発見もありましたが課題も見つかりました。

・工場長との会話が少ない。
・知識の無さ。
・予定通り進めることの難しさ。
・中国語は武器であってプラスαが必要であるという再認識。

就職活動にあたって今回、話を聞いた工場長のような部下をまとめるような人たちと関わることが必ずあります。そこで矢野尊嗣の印象を残すかで勝負が分かれます。私は工場を伺ったとき工場長との会話のキャッチボールが少なかったと感じました。それと同時に知識の無さを痛感しました。これでは印象を残すことは出来ません。話を聞いて、自分の中で理解をして疑問に思ったことを質問することが必要だと思いました。またインターンシップに参加して予定は作りましたが、企業訪問前のアポイント失敗や仕事の体験内容の変更があり、その通り進めることの難しさがありました。

この研修の中で同じことを何回か聞きました。「中国語は武器でしかない」この言葉は日本でも聞いたことがあり、中国語を専攻している私には非常に頭の痛い言葉です。語学プラスαの必要性を再認識しました。

8月18日からの2週間このような環境で生活をした自信と収穫を忘れず、課題のクリアに努めていきます。最後に私たちを受け入れてくれたテクノセンターの皆さん、工場長をはじめワーカーの皆さんの協力に感謝します。

TECHNO CENTRE
日技城